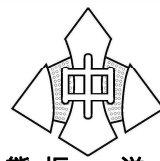


手をたずさえて

“KOHARADA WAY” 自分に打ちかて

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和3年3月12日（金）発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

卒業おめでとうございます

“恩送り” ~これからの生き方に大切にしてほしい言葉~

東日本大震災、そして福島第一原子力発電所事故から10年が経過しました。

「復興」という言葉のかげに、今でも苦しんでいる人たちがたくさんいるということ。

福島第一原子力発電所の廃炉作業も先が見えていないということ。

10年前の「3.11」から、日本そして世界各地で多くの祈りが捧げられてきました。そして、様々な人々の心に不安や悲しみが押し寄せる日々が続きました。

でも、運命は本当のことも教えてくれました。

心の苦しみも痛みも、人は分かち合えるということを…。

しかしながら、悲しくつらい出来事も時間が経てば、記憶は薄れていきます。だからこそ、我々は「福島人」として、あの大震災、そして原発事故を風化させてはならないということを、今日ここで再確認したいと思います。そして、新型コロナウイルス感染拡大による臨時休業措置、様々な行事や活動の中止・縮小、制限、そんな困難の中で、きみたちには、悔しさ、悲しみ、虚しさ…様々な思いや感情が湧き上がったと思います。ウイルスという、放射能と同じ“目に見えない敵”との戦いは未だ続いていますが、今回、お別れ会とこの卒業証書授与式の2つの卒業式を実施できたことの意味はとても大きいものです。

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

コロナ渦の中にあっても、小原田中学校を支え、様々な活動の原動力となってくれたきみたちは、お父さん、お母さんにとって、誇りであるように、我々教職員にとっても誇りです。そんなきみたちへ、私からの最後のメッセージです。

私たち人間は、一人では小舟のように頼りない存在であり、荒れたり凪いだりする人生という大海原をあてもなく木の葉のように彷徨っているようなものです。しかし、そのことを承知していれば、私たちは、自分は「生かされている」という謙虚な心持ちになれるのだと思うのです。他者によって自分は「生」をまっとう出来ていると感じられるのではないのでしょうか。

「恩返し」は、誰かの恩に報いることです。

「恩知らず」は、受けた恩を忘れることです。

「恩着せがましい」は、恩を押し付けることです。

ここに同じ「恩」という文字を使った、とても素敵な言葉があります。

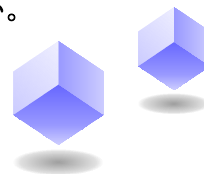
それは、『恩送り』という言葉です。

『恩送り』とは、人から受けた恩を誰か他の人に送ることです。私たちの「生」は、その『恩送り』によって、脈々と何世代にもわたって、時代を超えて連なっているのだと思います。それだけではありません。受けた恩を誰かに手渡すことで、私たちは、互いに生かし合い、支え合っているのではないのでしょうか。

ただ、『恩送り』をするためには、恩を感じるしなやかな感性がなければなりません。他者に対しての適度な緊張感と柔軟な感受性、さらには豊かな想像力がなければ、他人から受けた行為に感謝することは出来ません。そのような感覚が今の日本では希薄になっているように思えてはなりません。

「恩を仇で返される」ということもよくあることです。

だからこそ、まずは、「恩」という言葉の本当の意味をしっかりと考え、行動に移していきたいと思うのです。誰かに恩を感じたり、他者に感謝したり、他者の存在をありがたいと思ったりする心は、決して干からびさせたくない強く、強く思います。



卒業生のきみたちにとって、「恩人」と言える人はいますか？

自分の頭の中で思い浮かべてみてください。どんな人の顔が浮かんできましたか？

きみたちの「恩人」の第一は、きみたちを愛情いっぱいに育ててくれた、お父さん、お母さん、そして、家族の方々であるということを決して忘れてはなりません。

これからの新たな出会いにより、きみたちの「恩人」となる人が現れることもあるでしょう。

さらに、きみたち自身が、他の誰かの「恩人」になる可能性もあります。

人は人の生き方に出会い、感動し、自分の生き方を思う。

感動は想像力となり、生きる力となる。

生きる力は、また別の一人を感動させ、その連鎖が続いていく。



どうか、人との出会いと人とのかけわりを大事にして、恩を受けた人に対する「恩返し」だけではなく、次へとつながる『恩送り』のできる生き方をしてほしいと願います。そして、私の最後のメッセージのキーワードである『恩送り』という言葉をも、いつか思い出してもらえれば、うれしい限りです。

今日できみたちともお別れですが、“別れが、出会えたことの幸せに気づかせてくれます。”

115名の卒業生のきみたちと出会えたこと、本当にうれしく思います。そして、この出会いに感謝します。本当にありがとう。

人はみな、だれもが通ったことのない自分がはじめて通る道を一生かかってあるく。

どうか、自分の夢を、とことん、リアルに描いていってください。

～ 令和2年度第60回卒業証書授与式 校長式辞より ～

保護者の皆様へ

長きにわたるご協力とご支援に感謝申し上げます

お子様のご卒業おめでとうございます。115名の卒業生たちは、この3年間で大きく成長しました。特に今年度は新型コロナウイルスによって、当たり前の学校生活の実現がかなわなかった面もありましたが、卒業生達は小原田中を支え、活気づけてくれました。そして、卒業生の誕生から今日まで、喜びや苦しみを共にして見守り続けてこれた保護者の皆様へ心よりお祝い申し上げます。これからも、優しさや厳しさの中で我が子を信頼し、心の絆をしっかりと結んでいただくよう、お願いいたします。

「近い将来、10人に9人は今と違う仕事をしている」(米：ラリー・ページ)

「20年以内に、今の仕事の47%は機械が行う」(英：マイケル・オズボーン)

このように、近未来の社会における劇的な変化を予測する学者がたくさんいます。30年前には考えられなかったスマートフォンの普及と進化。自動運転システムの普及。そして、AI(人工知能)の進化。我々が小説やテレビ、映画などで観てきた近未来の社会が現実的なものになっていくのではないかと考えます。また、今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、日本は厳しい挑戦の時代を迎えていることも予想されます。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新などにより、社会構造や雇用環境が大きく変わり、子どもたちが就くことになる職業の在り方も、現在とは様変わりすると言われています。今からこれらのことを意識していかなければならないと痛感しております。さらに、突如として甚大な被害をもたらす自然災害の発生や未知のウイルスの感染など、予期せぬ出来事への心構えや日頃からの備えについても、真剣に考え、できることを行動に移さなければなりません。

キャリア教育を専門とするある大学の先生が「これからの子どもたちは、線路を進んできた電車が自分の前で停まるから、それに乗ればいいという進路ではなく、自分の力で運転する車で曲がりくねった道を進んでいかなければならない」と言われていました。様々な困難にぶつかったとしても、それらをリカバリーし良き方向へとコントロールしながら変化の激しい社会を生き抜く力を身に付けていかなければいけないということだと思えます。

これまで長きにわたり、PTA活動や部活動等でのご支援、さらには新型コロナウイルスへの対応や感染症対策等、本校の教育活動に寄せていただきましたご理解とご協力に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

